

中国画における伝統の復興と発展
—日本画材料・技法研究を通して—

2018

森山知己 教授

倉敷芸術科学大学大学院

芸術研究科

芸術制作表現専攻

趙同家

博士論文等内容の要旨

申請者氏名：趙同家

本論文は、中国画の伝統の復興とその発展における取り組みを日本画材料と技法研究を中心にして研究し論じたものである。

絵画表現において決まりごとはないと私は考えている。しかし、何故材料や技法について研究するのかといえば、それが自己の表現を形作る重要な要素と考えるからである。例えば、人が何処か目的地に行こうとする場合、どのようにしてたどり着くだろうか。歩いて行こうとするのか、もしくは車で行くのか、はたまた新幹線か、飛行機か……様々な移動手段、方法を取り得ることができる、筆者は絵画表現も同じだと考える。自分らしい良い作品を作るためには、どのようにしてそれを実現するのかを絵画の歴史に学び、考え、選び、また作りださねばならない。つまり、材料・技法研究は、筆者にとって絵画表現を行う上での移動手段であり、また道となるものである。

天然岩彩画は、唐時代において主に洞窟に描かれ、寺院での仏教を題材とした壁画や大青緑金碧山水の形式で隆盛を極めた。

筆者は中国の美術大学で中国画専攻を選んだ。そこで中国古典絵画の模写や臨模の授業を履修したが、実物と出来上がった制作結果では材料の質感が全く違うことに気付くことになった。その原因は、使用した材料が現代の化学によって作られたものであり、古代の天然材料の質と全く異なっていたからである。伝統的な顔料の生産手法や使い方の伝承が

途絶えたため、制作を行う者はいくら工夫しても古代絵画の美しさが再現出来なかったのだ。

『平山郁夫絵画展』がきっかけで、筆者は初めて本物の日本画を見ることができた。日本画の素晴らしさ、絵の具の美しさに強く心を打たれた。材料はどの様にして塗られ、キラキラと輝くのはどの様な絵の具なのか、また金箔はどのようにして貼られたのか、またそれらはどんな道具を使って行われているのかと、いろいろ考えを巡らすことになった。それぞれの疑問を解決するために2012年、尾道市立大学大学院美術研究科日本画コースに進学した。修士課程で研究を行ったがわからない事柄、謎が残り、倉敷芸術科学大学大学院芸術研究科博士後期課程で引き続き研究することにした。

本論文は、博士課程後期期間中に実際に描き制作研究した日本画で自分が体得した絵画材料と技法について、その理解と応用についてを記したものである。加えて日本において研究、習熟した東西における古典絵画材料と技法についてを中国に伝え、広く共有しようとするものである。

研究をおこなった材料と技法の可能性を自らの絵画制作に応用すると同時に、画論と実践を比較し論じた。中国帰国後、筆者は学んだ日本画材料と技法についてを、中国画の制作に生かし、また様々な平面作品、立体彫像などにも応用したいと考えている。そのためこの研究も付記し、これら取り組みを論文構成の軸とした。

本論文は四章で構成される。

第一章「日中画論研究、模写による実践研究」について述べた。第1節「中国画から日本画への展開分析」では、先ず、中国の画論『介子園画伝』や『歴代名画記』などと日本の画論『本朝画法大伝』、『画道要訣』、『丹青指南』、『画筌（粉本）（教本）』これらの相違点を比較して述べ、また、中国画と日本画の定義、素材、形式についても述べた。第2節「日中画論研究」では、画論研究は不必要という画家もいるが、実際には非常に重要な制作における要素だと私は考えており、それについて論じた。それは日本と中国絵画における審美の大切な根拠であって、技法理論と絵画批評の総和である。第3節「模写による実践研究」模写の定義、あるいは模写の種類について例を上げ述べた。第4節「模写の技法に関する研究の意味」では、模写は学習を目的としている。それは同時に新しい絵画形式を生み出す可能性をも持つ。今後の絵画創作に大きな役割を果たすことができる。第4節の1「中国の模写（臨模）」では、中国敦煌壁画模写で行われた現状臨模、整理臨模、復原臨模、これら三種類の形式について説明した。第4節の2「日本の模写」では、東京芸術大学、愛知県立芸術大学、京都市立芸術大学三大学の取り組みについて、見学したことを述べた。第4節の3「研究の意味」では、中国画論の南齊謝赫『六法』の中に紹介される「伝移模写」を取り上げ、同時に西洋画家たちが模写することも重視し、古今日中、模写を行わないことで伝統技法、材料、描き方など全てが途絶えてしまう危険性について述べた。模写手法の解説を行うと同時に、制作—模写—制作と循環する筆者の絵画制作研究手法についても記す。

第二章「日本画制作における材料について」では、第1節は、「絵画とは」で、絵画の

定義、歴史について解説し、また、絵画の価値観も含めて述べた。第2節「絵画材料・技法に関する研究の意味」では、材料の多様性が画家の表現手段を豊かなものにするのと同時に西洋と日本における画家の表現を比較し述べた。材料技法の選択は、画家自身の個人的な表現であり、伝統絵画技法、また模写から得られた技法は、素材、技法、マチエールの選択を豊かにしてくれることを解説した。第3・4節「中国画と日本画の材料、技法、道具」では、両国絵画を比較しながら、絵画基底材、絵の具によって使用する道具も異なることを説明した。第5節「テンペラ古典技法と日中絵画技法の共通点」では、実際に三分野の絵画を制作した上で、分析した相違点、絵画制作の目的、意味、そしてどのように次の制作へと繋げていくのかについて述べた。

第三章「制作における材料、技法の試行錯誤」では、自己の試作、京都花鳥館、院展入選作のプロセス、具体的な技法を、それぞれの作品によって詳細に論じた。第1節「制作における金属材料」では、銀箔を硫化させ、硫黄末や湯の花硫化材として、銀箔の微妙な変化で文字、模様を表すことを実験した。第2、3節では、「泥絵の具の作り方、及びその使用方法と岩絵の具の表現」についてそれぞれを実例をあげながら解説した。第4節「胡粉と墨」では、胡粉と墨が、日本画を制作するときに欠かせないものであることを紹介し、同時に単に白色、黒色という色相としてのみならず、墨と胡粉を混ぜ、具墨という物質性を強めた絵の具を作れることを具体的な制作例をもって論じた。

第四章「修了制作について」、新しい山水画の創造をテーマとした。素材：雲肌麻紙（機械制）、鳥の子、障子紙、墨、岩絵の具、水干絵の具、三千本膠、金泥。技法：山水画技法、小釜劈皴法、胡椒点など、設色：小青緑法、紙面に岩絵の具を重ねて、薄塗り。今ま

で得たものを融合し制作することによって、日本で学んだ知識・技法をどのように中国山水画に融合するのか、また以前とどのような違い・変化があったのかについて解説した。加えて平面、立体創作を行い、新しい技法・材料を使用して実作し、その創作意図と、制作過程における研究結果を示して研究成果が実証可能であることをまとめた。